

2019年03月26日(火)【外為L a b】松田哲

タイトル:【今回のFOMCの対処法は、ドル/円とユーロ/ドルで異なる】

先週(3月20日)のFOMCでは、事前の予想通りに、政策金利の据え置きが発表された。

そして、FOMC後の声明では、米経済の減速と、インフレ見通しの引き下げに言及し、2019年(今年)の利上げは無し、2020年(来年)に1回の利上げが発表された。

さらに、FRBの保有資産縮小(バランスシートの縮小)を、9月に終了する方針を発表した。

政策金利の据え置きは予想通りだったが、年内(2019年内)の利上げを否定したことは、サプライズであった。

今の時点で、決めつける必要はないが、場合によっては、2020年に1回の利上げも、先々このことであり、どうなるか分からぬ。

つまり、金利上昇局面が終了し、金利下降局面に突入した可能性も、視野に入ってくる。

ただし、今の時点では、金利上昇から金利下降に転換したと判断することは、時期尚早と考えます。

だから、当分の期間(2019年内はもちろんのこと、2020年のいずれかの時期まで)、現在の金利水準が、据え置かれる、と考えることが妥当でしょう。

+++++++++++++++++

先週(3月20日)のFOMCの声明を読み解くと、ドル金利の上昇局面が終了した可能性があります。

トランプ大統領が、FRBに圧力をかけたので、金利引き上げに、歯止めがかかったことも否定できない、と考えます。

FRBの独立性が棄損されたのならば、非常に、残念だ、と考えます。

ただし、トランプ大統領の圧力だけではなく、実際に、米国経済がピークアウトしている状況に注目すべき、とも考えます。

つまり、米国経済の現在は、高止まり状態、高原状態であり、今後、後退する可能性が非常に高い、と認識する必要がある、と考えます。

+++++++++++++++++++++

上述したように、先週（3月20日）のFOMCの声明の中身は、米国経済が減速していることや、年内（2019年）のドル金利の引き上げの可能性が無くなつたことであり、「ドル売りの材料」である、と判断します。

ドル／円に関しては、素直に「ドル売り円買い」の材料になり、FOMC後のマーケットでは、ドル／円は、111.00を割り込み、そして、チャート・ポイントであった110.00も割り込み、今のところ、109円台後半の安値を付けています。

今回のFOMCは、今後のドル／円の値動きにも、大きく影響を与える、と考えます。

つまり、「ドル売り」のプレッシャーになる、と考えます。

+++++++++++++++++++++

当然のことながら、先週（3月20日）のFOMCは、ユーロ／ドルに関しては、「ユーロ買ひ米ドル売り」の材料と考えます。

しかし、欧州域内の経済や、ブレグジット問題（英国のEU離脱問題）を考察すると、安易に、「ユーロ買ひ米ドル売り」に対応するべきではない、と考えます。

つまり、先週（3月20日）のFOMCは、「ユーロ買ひ米ドル売り」の材料ですが、この米国の金融政策の変更ばかりに、注目するのではなく、欧州自身の抱える問題点にも注目するべきだ、と考えます。

ユーロ／ドルは、すでに、「下落トレンド」を形成中であり、大きな流れ（大局）に従うのならば、トレンドに従っての「ユーロ売り米ドル買ひ」のスタンスを変更しない方が良い、と考えます。

+++++++++++++++++++++

（2019年03月26日東京時間14:40記述）